

随想

恩師の思出

清原貞雄

こゝに恩師と云うのは私が大学生時代に教
えを受けた先生方である。私が教えを受けた
のは明治四十年代であつて半世紀近くも昔の
事である。私は京都大学の史学科の才一回の
卒業生であり、東京大学が当時才一級の大家
を擁して居つたのに対して新設の京大史学科
は新進気鋭の小壮学者を以つて陣営として居
つたわけである。無論後には夫々老大家にな
つた人々であるが当時は新進の人々であり、
東大に対して全然違つた特色を旗じるしとし
て出発したのである。それら新進の学者達が
当時どんな学風を携けて立ち、どんな態度を
以て学生を指導したかの一端を述べる事は同
じ学問の道にある人々に何程かの興味と参考
資料とを与える事が出来るかと思われる。勿
論私が直接接した諸先生であるから其の範圍
も狭く、又数十年前の事を離げな記憶を辿つ
て書く事であるから大まかな話に過ぎない事

を御断りして置く。

私が五高から京都大学に行つた時の才一の
印象は当時の学長狩野亨吉先生が何かの会合
での訓示で、諸君は最早一人前の紳士である
から紳士として取扱う、諸君も目から紳士を
以て任ぜよと云う一言であつた。私共小学の
頃の記憶に依れば先生の生徒に対する言葉は
割合に丁寧であまり呼び捨てにせられた記憶
は無い。中学になるともつと丁寧になり、高
等学校になると一層丁寧になつた様に思う。

今は映画などで見ても小学も中学も大分違
う様で、大学の先生が学生に対する言葉も私共
が中学の時に先生から云われた言葉よりも乱
暴な様に思われる。之は一般の民主化の傾向
も逆行の様に思われるが、教育上どちらがよ
いのであろうか。

話が横道に外れたが、大学に入つてからは
狩野学長に云われた事は全く真実であつて教
授が学生に対する言葉は全く対等の言葉であ
つた。特に最初に会つた内田銀蔵先生等は誠
に丁寧極まる言葉で応対せられた。学生が先
生に対する言葉と云つても、先生以上の丁寧
な言葉は無いから全く対等であつた
内田先生は童顔である上に丸刈頭であつた

めに、初めて研究室で御目にかかつた時は同
行の私の友人は助手と間違えた程である。

先生は非常に用心深い方で晴雨に拘らず必
らず洋傘を携えて外出せられた。友人二、三
と御宅を訪問した時、桃を出されたがそれは
煮てあつて、先生は「之は十分煮であるから
大丈夫ですから御心配なく召上つて下さい」
と云われた。又之は一級下の学生から聞いた
話であるが、二、三人で御供をして伊勢に行
つた時汽車で弁当を買わされた。学生は自分
の分の金を出そうとした所、そんな事をする
ものでは無いと云つて叱られて先生が全部出
し、さて食事の時になると先生は弁当を開い
て、先づ玉子焼をはさんで之は古いかも知れ
ぬから召し上らぬ方がよいでしょうと云つて
窓から捨てて学生にも之に倣わせ、次にかま
鉢と云う風に次々に捨て、最後に残つた梅干
だけで弁当を使つた由、如何にも内田先生の
しそうな事である。

内田先生の研究態度には二つの特色があつ
た。一つは是迄の成果を出来るだけ活用する
事であり、今一つは一つの専門的研究も出来
るだけ広い知識を基礎とすべし、と云う事であ
つた。前者の現われとしては講義に當つて
著書・雜誌等を一抱え机の上に積み上げ、あ
れこれ抜いて、あの説この説を引用しつ

それをまとめて行くやり方であつた。之は先生の謙虚な性格から、他の学説を尊重すると云う形になつたものであらう。他の一つに就いては、先生は初めから狭く専門に入る事を不可とし、出来るだけ広く知識を習得する必要を説かれ、其の例としてパリのエツフェル塔を挙げられた。エツフェル塔があるだけ高いのは其の基部が驚く程広く取つてあるからでもし基部が狭少であつたら必ず顛倒してあれだけ高くは出来ないと言われ、其の理由で心理学・経済学・統計学・政治学・社会学・哲学等も必修科目であつた。只社会学は歴史学には割合役に立たぬと云われた。先生の史観に關連するものであらう。先生が著述をする場合は推敲に推敲を重ねるので極めて遅筆であつた。それだけ其の名著日本近世史に見る如く甚だ氣品の高い名文であつたが極めて寡作で、全集は相当大部であるが大部分は講演である。

三浦周行先生はすべての点に於いて内田先生と対照的であつた。三浦先生は丸刈ながら其の白哲端麗な容貌と犀下の義経鬚と謹嚴な態度とは何か御公卿さんと思わせる所があつた。一口に云えば何んだか恐いと云う感じであつた。然し修学旅行の時は宿で学生と一緒に一杯飲むし、時には意外な冗談を飛ばされる事もあつた。

恩師の思出

先生の研究は根本史料と云う事を力説せられたので内田先生の如く他人の研究を活用すると云う事はあまり重きを置かなかつた。他人の著書を漫然と読む事はあまり役に立たぬものであると云う言葉を漏らされた事を記憶して居る。史学研究法は函教授が毎年交互に担当せられたが内田先生は史観の問題に重きを置かれ、實際の研究法はラングロア、セーニヨウボウに拠られたが、三浦先生は古文書の活用法とも云うべきものを基礎とせられた三浦先生の古文書読解の達者な事と正確さとは有名であつたが、活字を読むより古文書を読む方が快適にならねば駄目だとよく云われた。そんな事が果して真実だらうかと當時は疑つたが此頃古文書に親しんで見て始めて先生の言葉が少し解つて来たような氣がする。内田先生の学風と三浦先生の学風とは一長一短があつて両者を兼ねて始めて完璧だと思われるが、私如きは両方共汲み取り得なかつたのは慚愧の至りである。内田先生の遅筆に反して三浦先生は、根本史料に依る研究でありながら、矢継早に大著述を出された(主として論文集ではあるが)のは驚異であつたが不幸癪のために六十歳で他界せられたのは痛惜に堪えない。

両先生に次いで学恩の深かつたのは喜田貞吉先生である。高等学校時代想像した喜田先

生の相貌は白哲長身の貴公子型であつたが、實際は全く反対でズングリ太つた野人型であつた。容貌も性格もそれに相応わしい人であつた。こんな事を云うと大變失礼な事を云う様であるが、先生自ら之を認めて教室や講演でも堂々と告白して居られた。大名は代々美人を妻に迎えるから遺傳的に大名面と云う立派な顔が出来上がるが僕の家は昔から貧乏であつて、女の屑しか妻に迎えられぬから遺傳的に僕の様な顔になつたと云つて居られた。普通なら聞いた方でちよつと困る所であるが先生が平氣で云われるので釣り込まれてツイ笑つて終つたものである。然し頭は大變よかつた。大学卒業の成績も抜群であつたそうである。古代史を講義して居られたが日本書紀等はその文章を殆んど暗記して居られた様である。全くの野人で少しも氣取らず、学生に対して心から師弟關係と云う事を忘れて友人的の交渉であつた。学校に対する不平でもあると相手が生徒でも平氣でそれを打まける事もあつた。一緒に郊外を散歩して居る時は農家で柿を買つてそれを縄で維いで首にかけて片つ端からかじると云う芸当もやつた。天衣無縫とも云うべき性格で社会的の交際で人と喧嘩などする人では無かつたが学問上の事になると誰彼の差別なく徹底的に突かかつて行くのが常で、学問上の敵は実に多かつた。法隆

寺再建非再建の問題で東京の関野貞氏との論争は有名であつたが、あれは元々八百長から始まつたものである。と云うのは、喜田先生主幹の歴史地理が売れぬので会員をふやすために此の論争を始めたのであるが、論争して居る中に双方共真剣になりほんとうの喧嘩になつて研究が深くなり、二人共此の問題で博士になつて終つたのである。喧嘩もこう云う喧嘩は結構である。

野人的で気取らないと云えば考古学の浜田耕作先生を思い出す。吾々が入学した時先生は助教であつたが学生を友達扱いにしたのみならず、教授になつてからも学生が遊びに行くとき先生も上向きに寝転んで話し学生も腹這いになつて話すといふ風であつた。後に総長になつてからは御会いしなかつたが先生の事だから別に構える様な事は無かつたであろう。上京しても決してホテルに泊らず日本旅館に泊つたが其の弁に、ホテルは男のボーイで面白くない、日本旅館で若い美人にサーブして貰う方がいいと云つて居られた。先生は坊ツチヤン臭い所があつてそれは年を取つても抜けなかつたが、其のためかどうか、何処に行つても(西洋でも)婦人には仲々持たようである。

次に学恩のあるのは内藤湖南先生である。先生は師範を出ただけの独学で、元郷里秋田

で田舎新聞の記者を振出しに新聞記者のコーズを取つた人で始めは支那の軟派文学を多く集めて居られたが火事で全焼し、それから硬派の漢籍を集め遂にあれだけの碩学となつたのである。先生も新聞記者出身であるだけに儀式張るとか気取るとか云う事は少しも無かつたのであるが、自から威厳が備わると云うのか、貫禄があり過ぎて仲々近づき難い所があつた。書道に於いても有名な大家であつたから一枚欲しいと思ひながら遂に書いて貰えなかつたのは残念である。先生の教は其の著書に依つて今も受けて居るわけであるが、学生中に受けた教訓として銘記して居るのは「歴史家の仕事は蚯蚓が土を掘る様に、片つ端小口から史料を探る事が必要である」と云われた事である。ややもすれば索引などを利用して容易にまともな上げようとする我々に取つて頂門の一針である。

次に地理の小川琢次先生である。先生は湯川秀樹博士の厳父である。地理科は東大では理科大学に置かれたが京大では文科大学の史学科の中に置かれた。小川先生は自然地理学で我々には地図学を講義せられたが先生は講義の原稿を作らず、ゲツセンの叢取等を机の上に置いてそれを訳しながら話をせられた。何の事か徹頭徹尾チンプンカンで少しも解らなかつた。之は私が頭が悪いからばかりでな

く、我々仲間のペテラン西田直二郎君も解らなかつたのである。学年に終りに全然解らなかつたから試験を受けても書けぬと先生に申出した所、それならノートを書せと云う事で全部及ぶした。全然判らぬ講義を一年間黙つて聞いた方も吞気なら、判らぬなら何故早くそ云わなかつたかといふと云わぬ先生も吞気で今頃の学生には喉おかしである。小生先生は情誼に厚い一方道義のやかましい人であつた。地理専攻の某が過つて料亭の女中に子を生ませた。それを知つた先生は某を呼んで結婚をすすめ、結婚すれば不問に附するが女を捨つれば退学させると云う事で某は結婚した。

地理学専攻は二人あつたが卒業の時丁度小樽高商に教授の口があつた。同じ某が先生に内緒に抜け駆けで小樽に行き運動したのを先生が知つてカン／＼におこり、他の一人を推薦して某を一生寄つてねと云い渡した。某は仕方なく教壇に立つ事を諦めて或る百貨店に入つた。気の毒と云えば気の毒だが某も悪かつたし、正義感の強い先生から云えば止むを得ぬ事であつたであらう。それも時勢の變つた今日から見てどう評価せられるであらう。こんな取とめも無い事を思い出すままに記せばきりが無いがあまり長くなるからこゝらで止めて置く。

(筆者は大分県史料監修員)